

現象世界に必然偶然と自由とがある その8

「蝶の雑記帳 139」の8

3. カントの導入する自由に対する批判

3.i 自然言語からする批判

カントが「自然」に対立的な概念として「自由」を導入することに対する疑問から始めよう。カントが「純粹理性をア・プリオリに考察する」という意味を十分理解できていない者が、それについて考察するのはむずかしいことである。だがわたしは、カントの説くことを次のように考えたい。

——純粹理性は、人間に具わる感性・悟性・理性の能力を総合したものの呼び名で、直感し範疇と論理によって仕分け、判断を行なって、概念を構成し、さらにフィードバックを伴う推論を進めて、対象の認識に至り、なおも反省的な思考を続けることができる。その営為が人間の表面に具体的に現われ出たのが自然言語だ——と。

この考えは基本的に妥当であるとして、自然言語の方から「自然」と「自由」の問題を考察してみよう。一人の言語運用者であるわたしは、拙い考察しかできないとしても、それなりにこの問題に取り組むことができるだろう。

自然科学が発展して自然についての認識が進んだ現代、自然科学の成果を取り入れて考えることが必要だと思う。カン

ト認識論の「主体－対象」の構えで一方の当事者である主体すなわち人間についても、生物学の成果に基づいて考察することが必要であり有効だ、とわたしは考える。

カントは、重要な要素となる悟性概念は人間に生得的に具わっている能力によって獲得され、そこから理性能力によって理性概念が醸成されるというふうに考えて、その哲学理論を構成する、とわたしには見える。それを自然科学の方から見ると、諸概念は生物としての人間が形作ったものと考えざるをえない。完全に証明することの困難な生物発生論と進化論を前提しなくても、人間の身心を科学的な実験を用いて研究する生物学は、人間の思考の働きを解明していくと期待することができる。思考の仕組みをそれぞれ概念的に解釈することが進むだろう。こう考えると、そもそも人間の獲得した自然言語は、思考の仕組みを体現している、と言えるだろう。哲学者の用いる概念はその自然言語に基礎を置く。

人間は、生活のなかで、諸対象を認識して諸対象を概念分けすることを続け、経験によって検証しながら諸概念の分離と関係づけを精緻にして、概念の体系を構成していく。人類は、そうして体得した言語体系を用いて生活し、経験をくりかえし概念の検証を続けて、言語体系をさらに精緻なものにしていく。概念を言語に言い表わして意味を伝えあうことは、言語の検証であり概念の検証でもある。そのとき、神経回路系で言語の論理性も働いて言葉と概念を精緻化するのだろう……。

だから、わたしのような一介の言語運用者が、自然言語を考察することによって哲学的な概念を調べることが有効である、と期待することができる。

日本語の話者は漢語の「自然」と「自由」を考えることになる。カントの言う「純粹」や「ア・プリオリ」は、概念を考察するとき自己の経験や先入観が入り込むのを避けるという意味合いをもつだろう。漢語の「自然」と「自由」から出発するのは、この点で有利である。というのは、合成語の「自然」と「自由」は漢字二文字からなり、漢字は表意文字であってそれぞれの基本の意味を大きく外れることができないから。

「自然」という漢語は、漢字自体の意味では「^{おの}自^{しか}ずと然り」、つまり、「おのずからそうあり・そうなる」を意味する。そこに「規則性」のニュアンスがあつて、「必然性」という概念とつながりをもつようになるのである。他方の「自由」は、漢字自体の意味では「^{みずか}自^よらに由る」で、「他に依らない」というニュアンスを含んで、さらに「束縛を受けない」へと拡張する動因をもつ。

動詞に引き当てて考えれば、「^{おの}自^{しか}ずと然り」は自動詞的で、「^{みずか}自^よらに由る」は他動詞的である。つまり、「自由」には人間という主体があるのに対し、「自然」には行為の主体が希薄である。そのことは、英語でも雨が降るといふ自然現象を「It rains.」と表現することに現われている。

Longman 英英辞典を見ると、英語「nature」を「everything in the physical world that is not controlled by humans」と説明する。ヨーロッパ語は、自然の主体は人間ではないと明確にしている。他方の英語「liberty」または「freedom」を、「the freedom and the right to do you want without asking permission or being afraid of authority」、「the right to do what you want without being controlled or restricted by anyone」、と説明する。現代の語義は、近代的な社会への移行に応じて（他人からの）束縛から自由であるという意味合いを強くし、古い語源の意味からずれた、と考えることができる。これに関して現代の日本語辞典も、「自由」の中核的意味を「他から束縛を受けないこと」と説明して、ヨーロッパ語の影響を受けていることを明かしている。

ところで、中国でも日本でも「自由」という語が文献に初めて現われたときには、「欲するままに行なうこと」を意味したらしい。こちらの古い意味の方が、英語の「自由」の根幹にある「to do you want」に近い。じつは、近代以後使われる日本語の「自由」は、明治維新前後にヨーロッパ語の翻訳語として新しく使われるようになった。その和製漢語が現代中国でも使用される。

以上のように考えてくると、当然ながら哲学的な思想も、歴史から自由ではなく、時代の状況に応じて変化しただろうことが判る。確認すれば、古い時代には、「自然」は「^{おの}自ず^{しか}と然り」、自由は「^{みずか}自^よらに由る」であったが、しだいに、「自

然」には「必然性」の意味合いが濃くなり、「自由」では「他からの束縛を受けない」という意味が強調されるようになったのである。ヨーロッパ語では、近世から近代へかけて高まった社会的な束縛からの解放を求める思想が、「自由」の意味あいを変化させたと理解してよいだろう。

1500年代後半から1600年代にかけてヨーロッパでは、ガリレイが科学研究を革新し、デカルトが考える人を出発点とする哲学を開始した。それは、認識の主体としての人間と認識の対象である自然とに対する考え方を大きく変えることになった。そのあとを継ぐスピノザは、世界を必然が貫くと考え、人間の自由はその必然を理解するところから生まれると考えた。スピノザが言う神はその必然性のことである。スピノザの考え方は、「必然」と「自由」の概念の変化の影響を受けている、と思う。スピノザの神は、カントの議論する絶対的必然性を体現するが、カントが議論するもう一つの最高存在者という理想から離脱している。

これに対してカントは、最高存在者も絶対的必然者もその実在を論証することはできない、と議論を尽くして論証し、そのような存在者を信じない。その冷めた判断にもかかわらず、カントは、哲学理論を形式的に完備させるためだろう、そういう理念と理想も俎上に載せて考察した。わたしは、カントがスピノザと異なる考え方をした客観的な原因の一つとして、ニュートンの『自然哲学の数学的原理』（プリンキピア）が出版されたからだ、と考える。

そのことは次の小節で議論するとして、自然言語からの考察をもう少し続けよう。上で述べたように、一方で自然の必然性が強調され他方で人間は束縛を受けない場合自由だと考えるようになったとき、「自由」が「自然の必然性」と両立できるかが議論されるようになった。自由を大事に思うカントはそれを最も先鋭に議論したのである。

しかし、自然言語から考えるとその議論は行き過ぎた、とわたしは思う。人の使う言語はどこでも必ず、「必然」と「偶然」の両方をもつ。見識ある人も、一般的な言葉づかいで、「必然、必ずそうなる」と「偶然、たまたまそうなる」を対義語として用いる。カントも例外ではない。事実、今集中的に考察している「第二篇純粋理性の弁証的推理について」の第二章の次の第三章で、「必然」と「偶然」という言葉を用いて考えている箇所がある。カントは、経験可能な現象世界にある物は条件づけられて存在すると考え、人はその条件づけの原因をさかのぼる背進を進めて原因を探る、というふうを考える。カントの議論を聞いてわたしは思った、モノは条件づけられて在るが、現象世界に実在することによって必然性を帯び、条件の系列として生起するところに偶然性の契機が潜む、と。そのことはあとで論じよう。

ここで重要なのは次のことである。自然言語は現象世界で形成されるのだから、その自然言語が「必然」と「偶然」の

両方をもつことは、人が現象世界に必然だけでなく偶然があると考えているということである。そうすると、現象世界には絶対的な必然性などない、ということになる。人は少なくとも偶然性の範囲で「自由」でありえる、ということである。人間に本性的に具わるものを尊重するカントはそれを認めていたことだろう。

しかしカントは、「自由」を「必然」から完全に引き離さなくては満足することができない、人間が自由に考え意志して行為することに最大限の根拠を与えようと望むから。そこでカントは、「必然」や「偶然」などにかかずらわなくて済むように、「自由」を現象世界から連れ出して「可想的領野」に据えたのだ、と考えざるをえない。つまり、それが上で考えてきたカントの主張の意図だ、と。

3.ii 科学的認識論における必然・偶然と自由

カントは、絶対的必然が理念にすぎないと知っていてなお、普遍的に必然的な自然の法則が感覚界すなわち現象世界を貫徹している、という考えを棄てきれない。

その考え方は、(J3)で、「感覚界における一切の出来事は、恒常不変な自然法則に従って全般的に結合しているという原則が正しいことは、先験的分析論の原則として確立されていて、いかなる例外も許さない」と判断することによって、強制されるのである。しかしそうすると、(I2)で言うように、「もし感覚界における原因性がまったく自然的な原因性だ

けだとしたら、どんな出来事も他の出来事によって、時間において必然的法則に従って規定されているだろう。従って現象が意志を規定する限り、現象は意志から生じる自然的結果としての行為をすべて自然必然的なものとせざるを得ないから、先験的自由の不成立は同時に一切の実践的自由を滅却するにいたるであろう」と危惧せざるをえない。しかしそれはカントの望まないことだから、「必然」とは独立な「自由」を対置し、その自由は自然的必然性と同じく原因性をもつが、自然的必然性の普遍的法則と調和できるものだ、とするのである。

カントのこの議論の進め方は、自然科学の先頭を切って発見された力学法則のとらえ方に理由がある、とわたしは考える。それを論じてみよう。カントの眼前にはニュートンの『自然哲学の数学的原理』が教える力学法則があった。力学の入門書の不十分な説明のせいで誤解している人があると思われるので、具体的に説明しよう。

ニュートンの運動の三法則(1687年)を、力の定義を明確にし微分方程式に定式化したのはオイラーである(1736年)。(オイラーの運動方程式はニュートンの三法則と差異をもつと山本義隆が論じているが、「蝶の雑記帳 134」で考察したように差異は本質的ではない)。今日では、ニュートンの運動の第二法則をオイラーの微分方程式で表現する。たいていの力学の入門書は、あらゆる物体の運動を貫く法則としてその

微分方程式を示し、働く力が変化しないかぎり、物体のある時点以前の運動も以後の運動もこの方程式に従うと説明する。この説明が力学現象の必然性を強く印象づける。

地球と太陽のような二つの物体の運動を考えてみよう。運動方程式を書き下すには慣性系と呼ばれる座標系を設定する必要があるが、たいてい、太陽と地球のあいだには第3法則のいう作用・反作用として万有引力が働くだけとして、方程式を書く。実はこのとき、火星や木星などほかの天体から地球に働く万有引力を微小だとして無視している。そうすれば、地球と太陽からなる力学系には、外から別の力が働かないから、太陽と地球の重心は動かない。そこで、第1法則を満足する座標系として重心を原点とする座標系を採用して、太陽と地球の運動を記述することができる。

ところが、太陽は地球に比べてずいぶん重く、その大きさは太陽と地球のあいだの距離に比べればはるかに小さいので、重心は近似的に太陽内部にあると見なすことができる。だから近似的に、太陽は動かず、地球が太陽から引力を受けて運動すると見なせる。そこでわれわれは、地球の運動を記述する運動方程式をそのように書き下し、それを解いて地球がどのような運動をするかに答えることができる。

あるいは、地表の一部分で投げ上げたボールがどのような軌跡を描くかを考えるときには、地表は水平で重力は鉛直下向きに働くと近似し、さらに空気の抵抗は無視できるとして、運動方程式を解けばよい。そのとき、ボールが飛んでいる範

囲は地球の半径に比べて無視できて、万有引力はほぼ一定という近似もしている。力学の入門書で出会う典型的な例題は、こういう種類の解きやすい問題である。

こういう練習問題を解くとき、たいてい簡易な説明がされるので、われわれは「必然性」が決定的なものという考えに誘われるのである。力学の法則である運動方程式は、数学でいう2階の微分方程式である。それを解くには2度積分する必要がある。ところが、積分には積分定数がつきもので、具体的な問題では積分定数の値を決めなければならない。それなのに、2階の微分方程式である運動方程式にその値は与えられてはいず、未定のままである。つまり、運動方程式という運動の法則は、これから起きる運動がどのようなものになるかを完全には決定していないのである。高校の物理では、微積分を使わないようにしているので、本当には積分をせずに積分の代わりに「公式」が与えられる。2度積分する代わりに憶えさせられる2つの公式には、物体が最初いた位置と最初の速度(速さと方向)を代入する文字が加えられていて、問題を解く者に課せられるのはその位置と速度をうまく代入することである。

正式に2階の微分方程式を解くときには、物体がどういう初期条件のもとにあるか(2つの初期値をどう指定するか)を考察することが重要である。説明が長くなるのを避けた

めに結論だけを言えば、ある天体が太陽から万有引力を受けて運動するとき、その天体と太陽がどういう位置関係にあって、天体が太陽に対してどの方向にどのくらいの速さで進んでいるかによって軌道は異なるのである。いつも地球やハレー彗星のように楕円軌道を描くとは限らず、双曲線軌道や放物線軌道を描くことも起きる。初期条件によってずいぶん異なる運動が起きるのである。

つまり、運動の法則のような決定的に見える法則下でも、いつも必然的に決まった一つの事象が起きるのではないのである。つまり、自然界で「必然」はスピノザやカントの言うように出来事を一義的に決定する、ととらえてはいけない。

運動の3つの法則をよくよく考えてみると、次のことが判明する。世界に単独者しかないとすれば、第1と第3の法則で言われている作用・反作用の力がないことになり、物体は静止または等速でまっすぐ進むはずであるが、単独者が静止しているとか移動したとか何を基準に言えるだろうか（運動を記述する座標系など決めようがない）。そして、第2法則の運動方程式の書きようがない。すなわち、単独者しかない世界に運動の法則などない。

ということは、運動の法則が普遍的だとすれば、世界は二者以上から成るのである。そして、たった二者から成る世界でも、上で見たように、必然的に一つだけの出来事が起こるのではなく、三通りの事象が起きる。その小さな世界にもい

わゆる必然とは異なる偶然がある、と言わなければならない。

世界に3つ以上の要素があったらどうなるだろうか。2つだけの場合には、重心を求めて、2つの物体の運動方程式を重心を原点とする座標系で書き下せば、2つの運動方程式には大きさが同じで方向が逆の力しか現われないから、鉛筆を持って頭の中で考えて解くことができる。ところが、1つ多い3つの要素になるだけで、3つの運動方程式はからまって近似的にしか解くことができない複雑な問題になる。三体問題と呼ばれ、18世紀中ごろから問題を簡略化して解くなどの努力がなされたが、数値計算をして得られる軌道は、一般的に非常に複雑で不規則なものになる。その不規則な運動に普通言われるような必然性があると言うことはむずかしい。むしろ偶然が支配する乱雑な運動と呼ぶ方がふさわしい。カントは三体問題が研究されていた18世紀に生きたのだが、それほど複雑で単純な必然とはみなせない事象が研究されていることを、おそらくよく知らなかったのだろう。

二十世紀になってクローズアップされたカオスはすでに三体問題にあったのである。一言で表現すれば、カオスとは「簡単な規則が支配しているのに、非周期的で予測不可能な運動」である。数値計算をするとき初期値をある桁数の数字で与えるほかないが、その桁数を上げて精密にしようとする、得られる解は異なるものにな

る。つまりは、刻々の正確な数値など知ることができないし、少し先にどんな運動が起きるかも知られない。自然界を見れば、数えきれない要素から成ることが歴然としている。運動方程式のように、数学的に決定論的な法則が支配しているとしても、数えきれない要素が規則性などなく出会って相互作用を及ぼしあう世界には偶然性があふれていると考えなければならない。この世界が必然性で貫かれているという見方は単純すぎるのだ。言い換えれば、現象世界は必然と偶然が織りなす世界なのである。自然言語に「必然」と「偶然」があることが、人類が長い経験によってそのことを識っていたことを明かす。

現代では、ニュートン力学は人間の肉眼で観察できる事象にしか適用できなくて、分子や原子のようなマイクロな世界では量子力学のシュレーディンガー方程式が成り立つことを知っている。しかし、シュレーディンガー方程式も2階の微分方程式で、初期条件の問題をもつ。多体の問題で多くの要素が出会う条件が、マイクロの世界の事象にも偶然性をもたらす、つまり、マイクロの世界も必然と偶然が織りなす世界だということになる。

すでに古くから鍾乳洞に形成される石筍が結晶をなすことが知られていたが、分子や原子のようなマイクロな要素が秩序ある結晶を構成する力をもつ。今日では、自然現象がもつと複雑なことが知られている。数えきれない要素が関与する

複雑系では、カオス的な運動の他方に、逆に、でたらめな乱雑さのなかに秩序が出現することが知られている。巨視的な世界でも、川の流れは極めて乱雑である一方で、橋げたのうしろ側に渦ができてそれが規則的な模様を描くことも起きる。秋空に大きな鯖が現われる現象を、ブリゴジンという人が、非平衡散逸構造と名づけた。外部と物質・エネルギーをやりとりするある部分系が、自己組織化によって非平衡でしかも秩序だった構造をつくりだすことができる。これを必然と偶然が織りなす構造と言うことが許されるだろう。

上の段落で取り上げた例も「自ずから然り」の現象、つまり自然現象と言えるだろう。そして、われわれは、自然のなかに生物と人間がいると考える。

ところが、考えることのできる人間は、自分が考え意志して行なうことは、「自ずから然り」ではないと考える。人間には「自由」がある、と。それが、カントがぜひとも深く考えるべきだとする問題である。それを自然科学の方から考えてみよう。

「自由」な行動つまり「もっぱら自らに依拠して考え意志して行なう」のは、「自ずからそうなる」のとは異なり、主体的な営為である。その営為は、主体となる人間があつてのことである。だから、現象世界の出来事を研究する自然科学の方から考えるとすれば、人間存在があることを前提して始めざるを得ない（自然科学は、カントが言うように、モノの

始原を完全に説明することができないし、生物と生物の一種である人間の始原も完全に説明することはできないのだけども)。われわれにできるのは、モノの存在と生物の存在を受け入れてこの問題を考えることである。ところが、力学を信頼したはずのカントは、自然科学が現象世界の外に踏み出すことができないことを知りながら、「自由」の根拠は現象世界の外の「可想的」領域にあるとした。カントの“自由論”は、自然科学から離脱するのである。自然科学の方から「可想的」なその「自由」に橋を架けることはできない。

だから、「人間にできる最善のことは現象世界のできごとを自然科学的に研究することだけだ」と考えるわたしは、架橋を諦めて、現象世界に「自由」があるかを考えてみたい。世界の事象は必然と偶然が織りあわされて起こるのだが、上で触れたように、鍾乳洞の石筍や空の鯖雲は、必然と偶然の機微のなかで乱雑とは言えない結晶や構造を生み出すことができる。しかし、それはまだ人間のような主体的な行動とは言えない。ところが、生物の細胞の中の DNA 高分子(結晶)は、相同の高分子をつくりだす能力を秘めていて、おびただしい細胞内物質と協働して、細胞の内部の構造を維持することができる。前者の石筍や鯖雲と後者の DNA や細胞のあいだには超えがたい違いがある。しかし、現に細胞とその中の DNA 高分子は生きて働く。われわれはそれを受け入れて考察しよう。

生きている細胞と細胞内の多様な物質は、「生きるという目的」を遂行するようにできている（どのようにしてそれが可能になったかは不可思議なままだが、現に生きている細胞がそのように活動するのをわれわれは目撃する）。生きるという目的を遂行するその自律的な働きが「主体」を生み出すのである。空の鯖雲は「自ずから然り」を越えられないのに対し、細胞は「自らに依拠して」行動する。「自由」はそこに生まれる。

同語反復しているが、細胞は自然の必然と偶然の機微のなかで準安定的に自律的に構造を維持し、その能力が「自由」をもたらす、と言うことしかわたしにはできない。非平衡散逸構造という言葉に倣うと、「再帰的非平衡成長構造」とでも呼べるだろうか。物質・エネルギーの流入と流出を許す膜で囲まれた細胞は、非平衡だが致命的な散逸を免れて一定の期間成長を続けることができ、本質的に重大なことだが分裂して相同な細胞をつくりだすことで世代を交代して、再帰的にまた成長過程をくりかえすことができる。生命をわたしなりに言い表わせばそうなる、まだ単細胞生物にすぎないが。

生きることを始めた細胞は、キノコのように多数が集まって共同生活をするものが現われた。さらに、それがどのようにして可能だったのか再び不可思議だが、細胞の共同体が一つの生命体に変身することが起きて多細胞生物が生まれた。単細胞生物でも驚くべき有機体だが、多細胞で一つの生命体

である多細胞生物の二段階で有機的な統合をどう表現すればよいだろうか。多細胞生物の一つの種である人間の一人として、生命と生物をわたしなりに言い表わせば、生命は「再帰的非平衡成長構造」をくりかえし形成し続けようとし、他方で、個体である生物は誕生し死滅するという有限な一生を送る、という存在である。その生命は、生存環境を包含する無機宇宙的宇宙の物理的変遷から自由なのではない。

こういうことをただ感嘆しながら、生物はいささか「自由」を獲得したと言うことしか、わたしにはできない。カントは、「自由」の根拠を「可想的」な領野に移すだけで説明をしなかったのだが、自然科学にも「自由」の根拠を説明することはできない。しかし、カントのやり方に習って、生物である人間は本性上生きることを目的にするように出来ている、それが自由な意志と行動をもたらす、と言うことはできる。この言い方は、まだほとんど根拠・理由を示していないけれども、いくぶん内容のある言明になっていると思う。

結局、現象世界は必然と偶然の出来事として生起するが、数えきれない要素がいくつもの階層をなして相互作用するとき、偶然の契機によって生物と人間が誕生した。そして、そうやって生じた生物と人間は、生きるために、数えきれない要素がいくつもの階層をなして相互作用して生起する事象のなかに自己の身心を投げ入れて、出来事に参加できるの

である。それを、人間は、自分の自由な思考と意志と行動によって為している、と考えるのである。

こう考えることは、「自由」が現象世界にあると考えることである。カントのように無理をしなくて済む。

独語 現在の自然科学的知見、特に脳・神経科学の研究から観れば、カントの認識論は武谷三男の科学論「三段階論」でいう「現象論的段階」にあった、と行うことができると思う。自然科学における脳・神経科学と同じ水準の科学的認識理論は、脳・神経科学の発展によって作りだされるだろう。だが、現在の脳・神経科学の研究は初期段階にあり、科学的認識理論はようやく「実体論的段階」に入りつつあると見るのが正しいだろう。

3.iii 実践における自由と必然偶然

「自由」を考えるのに一足飛びに人間に至った。自由の主体を思い浮かべるのに人間が最もふさわしいからである。しかし現代では、人間中心主義だと批判する人がいるかもしれない。わたしは元来、あまり人間中心主義的に考えず、人類を生物のなかにおいて歴史的に観ることを好む。

そうすると、生命誕生からのたいへん長い生命史を考えなければならぬ。それはよく知られていないことである。単細胞生物に「自由」があったかと問われれば困ってしまう。それでもわたしは、生きることを始めた生物は、地表で無機物とは異なる営為をしたのだと思う。石ころだらけの原野や

砂漠や雪原は印象深い風景をつくるが、目に見えない細菌たちは美しい風景はつくれなくても無機物がするのとはちがうように諸物の関係をつくりだしただろう。珪藻は、光合成ができるようになった。自らの力で無機物から有機物を構成できるようになった。珪藻は、自分では自由を行使していると思わなかったとしても、人間から見れば、自由への端緒を歩み始めたのだ。

進化を、「^{おの}自ずからそうなる」のか「^{みずか}自らそういう歩みを歩む」のか、どちらと見るかと問われたら、前者と答える人が多いだろう。それが、自然淘汰という見方である。しかし、大局的に進化の歴史を眺めれば、変化の方向があたかも目的だったという思いをかすかに抱く人がいるだろう。進化の過程に大きな断絶があって、人間が生まれたとき「自由」が突然生じたと考えることは、わたしにはできない。生きる目的を埋め込まれた生物の進化の過程で自由への契機がいつも働いて、ついに、自分を「自由」だと考える人間に至った、と考えるのが順当だ、と思う。

単細胞生物の段階から多細胞生物になるもう一つの奇跡が起きた。さらに、植物や動物に分化し、多様な生物種になった……。海や川から陸地に上がって生活の場をつくるということは、単なる無機物にはむずかしいことである。植物がニッチを広げて地表に残す痕跡は、無機物がつくりだす風景とは明らかに異なる。物質的に異質な痕跡を残すほど

の営為を、「^{おの}自ずからそうになった」というのは適當ではないだろう。

動いて移動できる動物は、もっと明確に無機物とは異なる営為を為す。現代生物学の知識は、動物のそういう能力を、神経系が脳と身体全体に張り巡らされて、フィードバック機能までもつからだ、と説明する。動物の脳の神経系はさらに発達した。類人猿は、環境の対象を観察し、推理し、どう行動するかを選び、どういう結果がもたらされるかまで知って行動する。そこには明らかに行為の選択肢がたくさんある。類人猿にそれらの行為をどのくらい反省し意識することができるのかは判らない。しかし、記憶があつて、失敗の恐怖はあるだろう。次にはそれも考慮して行動を選択できる。こういうことを総合的に考えると、類人猿には自由があると言うことは許されるだろう。

人間はさらに言語をもつ。つまり、概念を操作して考察する能力がある。人は、あらかじめ自分の行為を考量して行為を選択し、それが適切であるか成功するかどうかまで考えたうえで、これをやろうと思つて行動することができる。そして、自分の行なう行為の結果も引き受ける覚悟をもつて臨まなければいけない。この全体が、カントの言う「実践における自由」の問題である。

急ぎ足で生物史を巡って、どのようにして人間に「自由」がもたらされたかを拙く考えてみた。人間の自由は、生物の誕生に起源があり、生物が人間にまで至ったとき顕現した、ということがおぼろげに見えるだけである。まだ未熟な人類に、カントが求めたほど力強い自由はない。しかし、人間が追究するそのほかの根源的な概念と同様に、人間に理解可能なこの現象世界でその「自由」をなんとか運用しなければならないのだ、とわたしは思う。

さらに踏み込めば、世界の階層的な存在の仕方において、世界を貫く法則の系列でより下層にある物理法則の方から観ると、生物や人間にもたらされる「自由」が、必然性と偶然性の織りなす全般的な自然界でゆるぎない地位を占めている、と観ることができる。この世界観は正しいとわたしは判断する。

この考え方はすでにここまでの考察のなかに現われている。階層的な自然界の各階層において、数えきれない多種多様な要素が、必然的な物理法則に従いながら、たいへん偶然的な位置や動き方をして出会い互いに相互作用し、出来事が生起する。しかもいくつもの階層で、数えきれない要素が必然的な物理法則を踏み外すことなく、たいへん偶然的な関係を取り結んで全般的な自然界の出来事が生起するのである。その自然界で、必然と偶然が絶妙の作用を働かせて、生物や人間に「自由」に行動する可能性をもたらすのである。そ

の「自由」が根拠薄弱だと考える必要などない。現象世界の外に「自由」の根拠を求めなくても、現象世界に、人間が十分に信頼を置くことができ、手に余るほどの「自由」がある。これが、わたしの言いたかったこと、この考察の表題が示していることである。

2026年1月大雪

海蝶 谷川修